付日コート	投耒件日 名	<i>甲似致•子别</i>	文	授耒区 万	担ヨ教員名
15122	美学	2 単位 前期	1~2	講義	喜屋武 盛也

■テーマ 美学の歴史と諸問題

■授業の概要

美学は18世紀に成立した学問であるが、美についての議論、および今日の〈芸術〉に相当する領域についての議論は 古代から存在しており、かかる議論の蓄積をもとに美学という学問が成立したと言える。本講義では、そうした西洋美 学の歴史的構造を軸に据えて、様々なテクストを紹介する。

■到達目標

・西洋美学の主要概念や歴史の大枠を把握し、それを踏まえた思考と記述ができるようになる。

■授業計画·方法

- 1. ガイダンス/イントロダクション
- 2. プラトン (「ヒッピアス (大)」)
- 3. プラトン (「パイドロス」)
- 4. アリストテレス (「詩学」)
- 5. プロティノス/ルネサンスの理論家たち
- 6. ヴィンケルマン/バウムガルテン
- 7. ディドロ/ルソー
- 8. カント(「判断力批判」)
- 9. ゲーテ(「ドイツの建築」、「色彩論」)/シラー(「カリアス書簡」)
- 10. ヘーゲル (「美学講義」)
- 11. ニーチェ (「悲劇の誕生」)
- 12. ハンスリック(「音楽美論」)/フィードラー(芸術活動の起源)
- 13. クローチェ(「美学」)/ハイデッガー(「芸術作品の根源」)
- 14. ベンヤミン (「複製技術時代の芸術作品」)
- 15. 回顧と展望/定期試験

■履修上の留意点(授業以外の学習方法を含む)

・入門的な講義ではあるが、十全に理解するためには理論的な関心に基づく読書が必要である。紹介したテクスト、あるいは関連があると思われるテクストを自ら進んで紐解くこと。

■成績評価の方法・基準

- **口方法** 学期末の試験(100%)
- □基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書·参考文献(資料)等

□教科書 なし

ロテキスト なし(資料を配布する)

口参考文献 はじめに手に取る一冊としては、佐々木健一『美学への招待』(中公新書、701.1/Sa75)を推薦する。 美学および美学史の諸相については、佐々木健一『美学辞典』(東京大学出版会、701.1/Sa75)、小田部胤久『西洋美学史』(東京大学出版会、701.1/O81)、今道友信(編)『西洋美学のエッセンス』(ぺりかん社、701.1/Se19)を、基本文献を紹介したものとしては、『芸術理論古典文献アンソロジー 西洋篇』(幻冬舎、701/G32)を挙げる。現代英米美学の把握には、R・ステッカー『分析美学入門』(勁草書房)が有益。

<u>科目コード</u>	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
15123	現代芸術概論	2 単位 前期	1~2	講義	土屋 誠一

■テーマ 諸芸術を通じ「現代」という時代を考える。

■授業の概要

現代の芸術は、しばしば語られるように横断的かつ異種混交的な様相を呈している。高級文化と大衆文化の階層性も 既に溶解し、インターネットなどの今日の情報環境を下部構造として、多種雑多な「表現」が溢れ返っている現状であ る。そのような今日の現況において、「芸術」はいかなる位置を占めているのか、そして、今日における「芸術」とは、 そもそもいかなるものであるのか。本科目では、美術を中心として、写真、映画、建築、文学、音楽、サブカルチャー etc. といった、様々なジャンルの現状を概観し、現代の思想や社会環境との関わりを差し挟みつつ、今日の「芸術」を 把握するとともに、「現代」の諸問題を理解することを目的とする。なお、講義内容は、担当教員の美術を中心とした批 評家としての実務経験をふんだんに活用するものとなる。

■到達目標

・「ポストモダン」の時代概念を通じて、現代の諸芸術の問題を理解する。

■授業計画·方法

基本的には、下記のようなテーマをもとに講義を進めていくが、科目の本旨が「現代」にあるため、担当教員の批評家としての実務経験に基づき、講義の過程で生起した最新のトピックを反映させていくなど、いわば実践的な授業を予定している。したがって、必ずしもこの順序で進むとは限らない。また、講義全体を通じて「ポストモダン」という時代概念を軸として、芸術作品を読み解いていくこととする。

- 1. 「現代」の「芸術」とは
- 2. 「ポストモダン」とは何か(理論編)
- 3. 「ポストモダン」とは何か(応用編)
- 4. 現代美術の現況(紹介編)
- 5. 現代美術の現況 (分析編)
- 6. 都市と建築 デザインの諸相
- 7. 映像メディアとその表現
- 8. 情報環境と表現(紹介編)
- 9. 情報環境と表現(分析編)
- 10. まんがとアニメの歴史と表現
- 11. おたく化する世界
- 12. グローバリゼーションと芸術(紹介編)
- 13. グローバリゼーションと芸術(分析編)
- 14. 現代のおける芸術の可能性 (理論編)
- 15. 現代のおける芸術の可能性(理論編)

※定期試験は実施しない。

■履修上の留意点(授業以外の学習方法を含む)

- ・ただ受動的に漫然と話を聞くだけならば、受講しても無意味である。
- ・現代を考えるために必要な話題を、講義中に様々なかたちで提示していくので、そこから各自の関心に応じて主体的 に問題意識を汲み取って、主体的な予習復習に役立てて欲しい。

■成績評価の方法・基準

- **□方法** 受講熊度 (20%)、学期末レポート (80%)
- □基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献(資料)等

- □教科書 特になし
- ロテキスト 授業内で必要に応じて紹介する
- □参考文献 スチュアート・シム『ポストモダンの 50 人』(青土社、2015 年)

科日コート	授耒科日名	<i>单位数•字期</i>	文誦牛 火	授耒区分	担当教員名
		2単位			土屋 誠一 (コーディネーター)
15136	美術史	後期	1~2	講義	上間 かな恵(非) 小林 正秀(非) 鶴田 大(非) 中島 アリサ(非)

■テーマ トピックからひも解く美術史

■授業の概要

本科目では、「美術史」といえども、通史的なアプローチは行わない。むしろ、美術史(特に近現代)上で重要なトピックを各担当教員が提示し、それを受講生が自らの制作や研究のためのヒントとすることを目的とする。各担当教員の 実務経験を活かした応用可能な事例を含む内容を講ずるので、それを基盤として各受講者が役立てることを期待するものである。

■到達目標

・各担当教員が提示する美術史上の重要なトピックを理解すること。

■授業計画 · 方法

- 1. オリエンテーション/美術について考える基本的態度[土屋]
- 2. 戦争・平和と美術(1)「戦争画」とは/佐喜真美術館の成り立ちから「戦争・平和と美術」をみる[上間]
- 3. 戦争・平和と美術(2) 描かれた戦争と人間 佐喜眞美術館コレクションを通して考える
- 4. 戦争・平和と美術(3)「平和教育」に美術ができること、その問題点と可能性
- 5. 『美術史』成立期の書道と文学(1) 東アジア伝統美術としての書[鶴田]
- 6. 『美術史』成立期の書道と文学(2) 前近代の物語絵から近代の歴史画へ
- 7. 『美術史』成立期の書道と文学(3) 『美術史』システムと伝統的美術観の行方
- 8. 都市の近代化と美術(1) 時代背景[中島]
- 9. 都市の近代化と美術(2) 主題
- 10. 都市の近代化と美術(3) パリと芸術家たち
- 11. 20世紀 音楽と美術の共鳴/照応 (1) John Cage と未来派、ダダイスム [小林]
- 12. 20世紀 音楽と美術の共鳴/照応(2)武満徹と図形楽譜、小野洋子とコンセプチュアル・アート
- 13. 20世紀 音楽と美術の共鳴/照応(3) Brian Eno / ダムタイプとライト・アート、ヴィデオ・アート
- 14. 大衆文化と美術(1) 基本概念 [土屋]
- 15. 大衆文化と美術(2)「美術」と「大衆文化」との抗争
 - ※授業担当者の順序は上記のとおりではない。
 - ※定期試験は実施しない。
 - ※土屋、上間、鶴田、中島の授業は、博物館等での実務経験を活かして受講者の実践に資するものである。

■履修上の留意点(授業以外の学習方法を含む)

・授業で話された内容を自分の問題として吟味し、しっかりと復習すること。

■成績評価の方法・基準

- **口方法** 平常点 (50%)、期末レポート (50%)
- □基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献(資料)等

- □教科書 特になし
- ロテキスト 特になし
- □参考文献

ヴァーノン・ハイド・マイナー『美術史の歴史』ブリュッケ、2003 (開架一般 702.01/Mi46) ジョン・A・ウォーカー, サラ・チャップリン『ヴィジュアル・カルチャー入門』晃洋書房、2001 (開架一般 701/Wa) ほか、授業内で都度紹介する。

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
16122	民族音楽学概論	2 単位 前期	1~2	講義	小西 潤子

■テーマ 音楽文化の多様性を知る

■授業概要

民族音楽学的な立場から、音楽の概念と音楽を支える社会のしくみについて整理をした上で、わたしたちの身近な音楽や世界のさまざまな音楽の事例を視聴覚教材によって紹介しつつ、それぞれの相違点と共通点を明らかにする。また、地域社会における実践活動例を紹介し、音楽文化の多様性への理解と異文化交流への関心を促す。

■到達目標

- ・音や音楽を多角的かつ動態的にとらえる見方について学ぶ。
- ・グローバルとローカルなど、現代社会の諸側面を音楽から理解する。
- ・音楽および芸術を通して、いかに社会と接点をもっていくかを考えるための基礎的能力を養う。

■授業計画·方法

- 1. 音と音楽の境界
- 2. 自らの音楽体験と基層文化
- 3. 音楽を通じての異文化理解の可能性と限界
- 4. 西洋中心主義と比較音楽学
- 5. 「民族音楽」の発見と民族誌的記述
- 6. 民族音楽学の実践的理解とフィールドワーク
- 8. さまざまな楽譜と音楽の伝承
- 9. 音楽情報と保存
- 10. サウンドスケープ論の概要
- 11. 音と音楽のデザイン
- 12. 環境学としての音響生態学
- 13. 音楽をめぐるとローカルとグローバル
- 14. フェスティバルに見る音楽の創造的発展
- 15. 総括

※定期試験は実施しない。

■履修上の留意点(授業以外の学習方法を含む)

- ・積極的に発言や質問をすること。
- ・質問を投げかけたときには自分の意見を述べること。
- ・授業内容にしたがって、図書館や音楽資料管理室の文献、音源、映像資料を使って、各自予習復習をすること。

■成績評価の方法・基準

- **□方法** 授業内のミニレポート (80%)、授業への取り組み (20%)
- □基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。 学習意欲や主体的な取り組みが見られるか。関心や理解の深まりが見られるか。

■教科書·参考文献(作品)等

- □教科書
- ・指定なし。
- □参考文献(作品)
- その都度紹介する。

科目コー /	· 授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
16131	日本・東洋音楽史概論	2単位 前期	1~2	講義	高瀬澄子

■テーマ 日本とアジアの伝統音楽

■授業の概要

日本の伝統音楽については、各種目の成立時代順に概観する。アジアの伝統音楽については、地域ごとに概観する。

■到達目標

- ・日本の伝統音楽の各種目について、その特色と歴史的背景を理解していること。
- ・アジアの各地域の伝統音楽について、その特色と文化的背景を理解していること。
- ・日本とアジアの伝統音楽について、主体的関心を持つこと。
- ・理解したことや感じたことを、文章によって適切に他者に説明できること。

■授業計画·方法

- 1. オリエンテーション (授業の目的と対象について)
- 2. 日本の伝統音楽1 (雅楽)
- 3. 日本の伝統音楽2 (能楽)
- 4. 日本の伝統音楽3 (地歌・筝曲・尺八楽)
- 5. 日本の伝統音楽4 (人形浄瑠璃)
- 6. 日本の伝統音楽5 (歌舞伎)
- 7. 日本の伝統音楽6 (民謡・民俗芸能)
- 8. アジアの伝統音楽1 (東アジア:中国)

- 9. アジアの伝統音楽2 (東南アジア:インドネシア)
- 10. アジアの伝統音楽3 (南アジア:インド)
- 11. アジアの伝統音楽4 (西アジア:トルコ)
- 12. アジアの伝統音楽5 (中央ユーラシア)
- 13. 日本の伝統音楽7 (沖縄・アイヌ)
- 14. 日本の伝統音楽8 (近代・現代)
- 15. 日本とアジアの伝統音楽に関する総括

および定期試験

■**履修上の留意点**(授業以外の学習方法を含む)

- ・平成29年度以前入学者の履修科目である。
- ・毎回の授業で、前回の授業の内容を問う小テストを行うので、前回の授業について復習しておくこと。
- ・試験の詳細については授業中に予告するので、各自、参考資料を探し、準備しておくこと。

■成績評価の方法・基準

□方法

- ·平常点 (20%)、定期試験 (80%)。
- ・平常点は、小テストの提出状況について評価する。定期試験は、解答式と論述式を併用し、伝統音楽の時代と地域に関する 基本的理解、主体的関心、文章構成力等について総合的に評価する。

□基準

到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献(資料)等

□**教 科 書**: 適宜プリントを配布する。 □**テキスト**: 適宜プリントを配布する。

□参考文献

月溪恒子『日本音楽との出会い 日本音楽の歴史と理論』東京堂出版、2010年。

柘植元一・植村幸生編『アジア音楽史』音楽之友社、1996年。

科目コード	授業科目名	单位数•字期	<i> </i>	授業区分	担当教員名
16132	西洋音楽史概論	2 単位 前期	1~2	講義	三島 わかな(非)

■テーマ 「響きの可能性」を歴史的にたどってみよう。

~声の音楽から器楽そして、さらなる多様性をもとめて~

■授業の概要

- ・中世〜近世〜近代〜現代の欧州ならびに米国そしてアジア諸国の音楽作品を歴史的に概観する。
- ・各回のテーマに関する音楽作品を鑑賞し、その背景(社会制度と享受者、創作理念、作品様式)を解説する。
- ・作品ごとに、時代様式と個人様式について解説する。

■到達目標

- ・欧州ならびに米国そしてアジア諸国の音楽作品の様式的特色を理解できる。
- ・欧州ならびに米国そしてアジア諸国の音楽作品が成立した時代性を理解できる。
- ・音楽作品の歴史的展開を俯瞰し、「西欧諸国」および「非西欧諸国」との関係性について考えを深めることができる。
- ・近代以降の日本や沖縄における音楽創作の状況や、創作史における「洋楽」の意義について考えることができる。

■授業計画 · 方法

- 1. ガイダンス:「西洋音楽」および「外来音楽」の定義と時代区分法。本講義の目的と授業運営、評価方法の確認。
- 2. 中世・キリスト教(カトリック)の音楽
- 3. 中世・世俗音楽
- 4. ルネサンスの音楽
- 5. 日本人と「西洋音楽」との出会い、琉球人と「西洋音楽」との出会い
- 6. バロック時代・イタリアオペラと興行化
- 7. バロック時代・器楽の台頭
- 8. 古典派の音楽
- 9. ロマン派の音楽(1) ドイツ語圏
- 10. ロマン派の音楽(2) イタリア語圏、フランス語圏
- 11. 19世紀後半~20世紀前半(1) 東欧・北欧の動向、帝政ロシア崩壊とその後の動き
- 12. 19世紀後半~20世紀前半(3) オリエンタリズム、ジャポニズム
- 13. 近代日本における「洋楽」の展開
- 14. 20 世紀後半の多様性
- 15. 授業のまとめ及び期末試験

■履修上の留意点(授業以外の学習方法を含む)

- ・平成29年度以前入学者の履修科目である。
- 作品を聴取しながら毎授業のテーマについて考えるので、出席が前提である。
- ・初回授業までに、以下に紹介する参考文献の「はじめに」および「第2章」を熟読しておくこと。
- ・次回の授業のテーマに関連する学習は、以下に紹介する参考文献の当該章を事前に読んでおくこと。

■成績評価の方法・基準

□**方法** 平常点30%(授業への積極的な参加、教員からの発問に対する発言、コメントペーパーの提出状況) 学期末試験70%

以上を総合して評価する。

□**基準** 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献(資料)等

- □教科書 特になし。
- **ロテキスト** 毎授業時にテーマに関するレジュメや資料を配布する。
- □**参考文献** 柴田南雄『音楽史と音楽論(改訂版)』(財)放送大学教育振興会、2004 [1988](定価 ¥1602+税) 柴田南雄『音楽史と音楽論(岩波現代文庫)』岩波書店、2014(定価 ¥1200+税)

 科目コード
 授業科目名
 単位数・学期
 受講年次
 授業区分
 担当教員名

 16133
 音楽史
 2単位 後期
 1~2
 講義
 高瀬 澄子
 三島 わかな (非)

■テーマ 舞台芸術の世界

■授業の概要

各種の論点を通して、音楽史の諸相を講義する。今年度は、舞台芸術をテーマとして、歌舞伎やオペラの様々な作品を取り上げる。

■到達目標

- ・提示された論点の意義を理解していること。
- ・音楽史上の様々な事象や音楽作品に対し、問題意識を持てるようになること。
- ・授業で培った問題意識を、自らの制作・演奏・研究に活かせるようになることが望ましい。

■授業計画・方法

第1回~第5回は高瀬、第6回~第14回は三島、第15回は高瀬・三島が担当する。

- 1. オリエンテーション
- 2. 歌舞伎1: 仇討(あだうち)
- 3. 歌舞伎2:首実検(くびじっけん)
- 4. 歌舞伎3:侠客(きょうかく)
- 5. 歌舞伎4:変化(へんげ)
- 6. オペラ1:最初期のオペラにみる男女観
- 7. オペラ2:オペラ文化のアイドル的存在・カストラート
- 8. オペラ3:ジングシュピールと母語
- 9. オペラ4:オペラ・ブッファにみる抒情性と技巧性の一体化
- 10. オペラ5:「楽劇」を洋の東西で比較
- 11. オペラ6: 文化振興の起爆剤とオペラ
- 12. オペラ7:ジャポニズム作品の誕生と日本での受容
- 13. オペラ8:時事オペラにみる価値観の問い直し
- 14. オペラ9:現代におけるオペラの展開
- 15. 全体のまとめ、および定期試験

■**履修上の留意点**(授業以外の学習方法を含む)

- ・平成30年度以降入学者の履修科目である。
- 毎回の授業において、コメントペーパーの提出を求める。

■成績評価の方法・基準

- **□方法** 平常点 (コメントペーパーの提出状況) 30%、定期試験 70%
- □**基準** 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献(資料)等

- □教科書 適宜プリントを配布する。
- ロテキスト 適宜プリントを配布する。
- □参考文献 藤田洋『歌舞伎ハンドブック第3版』三省堂 2006。

中野京子『おとなのための「オペラ」入門』講談社 2009。

神木勇介『オペラ鑑賞講座超入門』青弓社 2012。

科目コー	ード 授業科目名	<i>单位数• 学期</i>	受講年次	授業区分	担当教員名
5250	ポピュラ一音楽論	2単位 後期	1~2	講義	久万田 晋

■テーマ 世界のポピュラー音楽史を概観する。

■授業概要

世界のポピュラー音楽の歴史、音楽的諸特徴、その社会との関係について理解を深める。

ポピュラー音楽を、市場経済、マスメディア、大衆社会がつくりだした二十世紀特有の現象ととらえ、主に北米(含イギリス)、中米、南米(ラテン諸国)、日本・沖縄のポピュラー音楽について、さまざまな視点から論じてゆく。

■到達目標

・各時代、各地域のポピュラー音楽を、音楽的特徴や音楽家だけでなく、その背景となる歴史的展開、社会文化状況も 併せて理解する。

■授業計画·方法

- 1. オリエンテーション (1回)
- 2. 初期のジャズ、ブルース、スイング・ジャズ
- 3. モダン・ジャズ、リズム&ブルース
- 4. ソウル、ファンク、ディスコ、ラップミュージック
- 5. ブルーグラス、フォークソング
- 6. ロックンロール、ロック
- 7. ロックの発展形
- 8. ラテン音楽1 キューバ、カリブ
- 9. ラテン音楽2 ブラジルその他
- 10. 戦前日本の流行歌
- 11. 戦後日本の流行歌(ムード歌謡、演歌)
- 12. 70年代以降のアイドル歌謡曲
- 13. 沖縄の新民謡
- 14. 沖縄ポップの現在
- 15. 全体のまとめ、試験

■履修上の留意点(授業以外の学習方法を含む)

- ・受講生は毎回の講義で取り上げられるポピュラー音楽についてできるだけ事前に学習しておくこと。
- 講義で取り上げられた参考文献や音源、映像に目を通して復習すること。

■成績評価の方法・基準

□方法 日常の出席状況・授業態度(50%)と学期末試験(50%)の両方にもとづいて評価する。

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。 世界のポピュラー音楽とそれを生み出した文化・社会状況について充分な理解ができているかどうか。 自分自身の演奏や創作意識と各ジャンルのポピュラー音楽との関係が適切に把握できているかどうか。

■教科書·参考文献(作品)等

□教科書:なし。必要に応じてプリントを授業で配付する。

□参考文献(作品)

- ・中村とうよう『ポピュラー音楽の世紀』岩波書店、1999(岩波新書)。
- ・森正人『大衆音楽史――ジャズ、ロックからヒップ・ホップまで』中央公論新社、2008 (中公新書)。

科目コード	授業科目名	<i>単位数・学期</i>	受講年次	授業区分	担当教員名
16905	演劇概論	2単位 前期 (集中)	1~2	講義	田村容子

■テーマ 二○世紀の中国演劇史を概観し、東アジアの舞台芸術について考える

■授業の概要

中国演劇に関する基礎知識を身につけ、とくに二〇世紀の京劇史を学ぶ。

中国演劇に描かれる女性像について、ジェンダーの視点から考察する。

■到達目標

- ・中国演劇の特徴を理解し、日本の舞台芸術と比較することを通して、東アジアの舞台芸術について考える。
- ・中国演劇に見られる思考の様式を知り、その歴史的・社会的な文脈を理解する。

■授業計画·方法

- 1. ガイダンス/中国演劇入門
- 2. 中国と日本の演劇史
- 3. 崑曲と京劇
- 4. 男旦と女優
- 5. 作品鑑賞 (『貴妃酔酒』)
- 6. 中国演劇の現代化
- 7. 中国演劇と日本
- 8. 二〇世紀の中国演劇に見られる日本人像
- 9. 中国の戦争映画に見られる日本人像
- 10. 作品鑑賞 (『紅灯記』)
- 11. 京劇の中の女性像
- 12. 中国演劇における戦闘する女性像
- 13. 紅い革命バレエの系譜
- 14. 作品鑑賞(『紅色娘子軍』)
- 15. 定期試験/講義のまとめ(男旦からモダンガールへ)

■**履修上の留意点**(授業以外の学習方法を含む)

・講義で参照した参考文献や映像資料に目を通し、紹介された作品やその歴史背景を理解すること。

■成績評価の方法・基準

口方法 平常点 (60%)、定期試験 (40%)の内容で総合的に判断する。「平常点」は、授業への参加状況と毎回のコメントペーパーの内容により総合的に判断する。

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献(資料)等

□教科書:なし、必要に応じてプリントを配布、映像資料を上映する。

□参考文献: 田村容子『男旦(おんながた) とモダンガール 二○世紀中国における京劇の現代化』中国文庫、二○ 一九年
 科目コード
 授業科目名
 単位数・学期
 受講年次
 授業区分
 担当教員名

 14061
 アートマネジメント概論
 2 単位 後期
 1~4
 講義 小越 友也(非)
 一件嶺 絵里奈(非) 小越 友也(非)

■テーマ 社会の中の芸術を考える

■授業の概要

近年、社会における芸術の役割は少しずつ拡大してきた。芸術文化そのものの価値に加え、例えば人と人を結びつける芸術の力が注目を集めるようになってきている。そのような中、芸術大学に在籍する者が、芸術と社会を結び付ける「アートマネジメント」、それと関わりの深い文化政策について学ぶ必要性は極めて高い。この講義では、各担当教員の実務経験を活かして、音楽・芸能と美術工芸の両分野、あるいは「理論」「歴史」「実践」の三つの研究領域を往還し、多様なテーマを取り上げる。

■到達目標

- ・芸術に関わる者が、芸術・文化活動を続けていく上で必要な基礎的な知識と方法論を習得する。
- ・日本や海外のアートマネジメントの展開と現状、沖縄における実践例を理解する。
- ・現代社会においてアートマネジメントがどんな役割を果たせるのか、その可能性と課題について考える。

■授業計画·方法

- 1 ガイダンス:芸術と社会(著作権を主軸に)
- 2 日本の文化政策(行政編)
- 3 日本の文化政策(民間・メセナ編)
- 4 戦後沖縄米軍占領下における文化行政
- 5 沖縄における文化行政
- 6 博物館とアートマネジメント
- 7 アートマネジメント実務
- 8 社会と芸術作品 そしてアーティストとは
- 9 公立ホールの事業 劇場の設備と仕事
- 10 公立ホールの事業 がらまんホールの事例
- 11 公立ホールの事業 教育・アウトリーチ
- 12 公立ホールの事業 アーティストインタビュー
- 13 クラシック音楽のアートマネジメント
- 14 琉球芸能・郷土芸能とアートマネジメント
- 15 アートマネジメント概念の拡大(社会包摂)

※定期試験は実施しない

■履修上の留意点(授業以外の学習方法を含む)

- ・ふだんから、自分の専門領域における様々な芸術活動、社会における芸術家の活動に興味関心を持つように心掛け、 講義で取り上げられるテーマについて、できるだけ事前学習しておくこと。
- ・講義で配布した資料は熟読すること。また授業で取り上げられた参考文献にあたり、また芸術関連事業を調べるなど し、将来の自らの活動領域の確認とその拡大を図ること。

■成績評価の方法・基準

□方法

・授業への積極的参加(40%)、コメントペーパー(10%)、期末レポート(50%)により総合的に判断し、評価する。

□基準

- ・到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。
- ・アーツマネージメントの展開や現状について説明することができるか。
- ・アート及びアーツマネージメントが社会に果たす役割について、各自の芸術文化活動と重ね合わせてその可能性と 課題を分析することができるか。

■教科書・参考文献(資料)等

講義ごとに、必要に応じて配布、または指定する。

科目コード 授業科目名単位数・学期受講年次 授業区分 担当教員名14051芸術とキャリアデザイン I各2単位 前・後期1~4講義 コーディネーター:新本京子

■テーマ 自分のキャリア(進路)をデザイン(設計)していく授業。

■授業の概要

進路については複合的であり正解は一つではないことから、自分の個性、価値観、能力の自己確認が必要とされる。 ワークショップ参加型の授業により、自分についての発見や気づきを得、それにより自主的で県芸生らしい自分独自のキャリアをデザイン(設計)し、いきいきと行動することができるようになることが目的。本科目では各担当教員の実務経験を活かして、県芸生としての自身の「魅力」と「可能性」について考え、自分の進路についてイメージし、本学で学んだ事を社会に繋げていくことの意義や意味を深く捉えることにより、納得のいく主体的なキャンパスライフを送り、その後のキャリアデザイン(進路設計)に活かすことを目指す。

■到達目標

- ・キャリアデザインに係る自らの意思を明確に論理的に述べることができる。
- ・授業の中で多くの学友やOB・OG、企業人等、他者との交流をとおして自発的に他者とのコミュニケーションを 円滑に行える。

■授業計画·方法

主にテーマに沿ったワークショップで参加型の授業を進め、他者との分かちあい・気づきあいをとおして他者とのコミュニケーションを円滑に行うとともに自己理解を深め、自分の将来像を探り、授業期間中のフィードバックシート (振り返り)により自己表現力を高めていく。

- 1. ガイダンス。授業全体についての説明。
- 2. 自分について考えてみよう(1)
- 3. 自分について考えてみよう(2)
- 4. 多様な進路の可能性(1)~ 探求編
- 5. 多様な進路の可能性(2)~情報収集編
- 6. 芸大での学びを活かそう
- 7. プロフェッショナルに聞く(1)~ 本学OB·OG編
- 8. プロフェッショナルに聞く(2)~ 企業人編
- 9. 社会の課題・大学生の課題
- 10. コミュニケーション力を鍛えよう
- 11. プレゼン力・チーム力
- 12. 自分らしいキャンパスライフプランを立てよう
- 13. 情報収集力 ~ネットワークとフットワーク
- 14. 自分らしいキャリアをデザインしよう
- 15. 定期試験は実施しない。授業の振り返り及び解説・まとめの後、最終フィードバックシート提出。

■履修上の留意点(授業以外の学習方法を含む)

- ・複数のゲストスピーカーによる講義方式。テーマによっては事前配布資料を元に自分の意見を発表できるように 事前学習(授業以外の学習)を行い、記述シートを提出する。
- ・学期中に「参考文献」に掲げた中から3冊以上を読み、コメントペーパーを提出する。
- ・他者との交流や将来の自分の理想の姿(目標)に対しての興味・関心・探求意欲を持って臨んで欲しい。

■成績評価の方法・基準

□方法 ・平常点(30%)、授業期間中のフィードバックシート(振り返り)及び授業以外の学習シート(20%)、 最終フィードバックシート(50%)。

・平常点は授業への参加状況。フィードバックシート等の記述内容においては『キャリアデザインに係る自らの意思を明確に論理的に述べることができるか。』『自発的に他者とのコミュニケーションを円滑に行えるか。』等を基準とし、総合的に評価する。

□**基準** 「到達目標」を観点として、履修規定に定める「授業科目の成績評価基準」に測り評価する。

■教科書・参考文献(資料)等

□**使用文献**: ゲストスピーカーが適宜プリントを配布する。

□参考文献:「自分をいかして生きる」

「新装版 ほぼ日の就職論「はたらきたい。」「佐藤可士和のクリエイティブシンキング」

「ふむふむ一おしえて、お仕事!」

「「私らしく」働くこと~自分らしく生きる「仕事のカタチ」のつくり方」 (進路情報コーナーに開架)

科日コート	<i> </i>	<i>单位致•宁期</i>	文誦午 次	授耒区分	担当教員名
14013 (14011) (14012)	芸術と風土 (芸術と風土A) (芸術と風土B)	2単位 前期	1~4	講義	栗国 恭子(非)ハラ アリーナ アレクサンドラ(非)麻生 伸一(コーディネーター)

■テーマ 「風土」から地域・芸術を考える

■授業の概要

過去から現代までの人びとの生活や、祭祀・芸能、芸術活動を取りあげ、「風土」と人間社会との関係や結びつきについて概観します。芸術を志向する多様な学生が受講することに鑑み、複数の教員が担当となりそれぞれの専門分野に即した講義を行います。

前半では琉球・沖縄の「風土」観について、後半では沖縄県立芸術大学の先生をお招きし、「風土」と表現(芸術活動)とのかかわりについて実習を交えながら学びます。

■到達目標

・「風土」と人類の営為の関係について、具体的に説明することができる

■授業計画·方法

複数の教員がオムニバス形式で行います。

- 1. ガイダンス/「風土」とはなにか(麻生伸一)
- 2. 民族芸術① 空間認識論―風土と聖なる空間、宇宙観、他界観、異界、空間認識とデザイン(粟国恭子)
- 3. 民族芸術② 沖縄の心意・美意識―風土と祈りの形、飛翔する<聖>、空飛ぶものと異界(粟国恭子)
- 4. 民族芸術③ 五感の文化―風土と香りの文化、香料とアジア・沖縄文化(丁子、ヤマクニブ、香) (粟国恭子)
- 5. 民族芸術④ 五感の文化―風土と色彩の文化、表象文化と色彩、技術と色彩(粟国恭子)
- 6. 「風土」と時代性①:子どもの表象(麻生伸一)
- 7. 「風土」としての「シマ」①:シマの想像力・記憶・記録(ハラ アリーナ アレクサンドラ)
- 8. 「風土」としての「シマ」②: 祭りが語る「シマ」(ハラ アリーナ アレクサンドラ)
- 9. 「風土」としての「シマ」③:シマの「英雄」(ハラ アリーナ アレクサンドラ)
- 10. 「風土」としての「シマ」④: 島々の関係性と神話 (ハラ アリーナ アレクサンドラ)
- 11. 「風土」からみる芸術世界(1): 三線と琉球沖縄の風土 (山内昌也・麻生伸一)
- 12. 「風土」からみる芸術世界②: 三線実習(山内昌也・麻生伸一)
- 13. 「風土」からみる芸術世界③:三線実習(山内昌也・麻生伸一)
- 14. 「風土」からみる芸術世界④: 三線実習まとめ(山内昌也・麻生伸一)
- 15. 「風土」と時代性②:戦後の表象/まとめ (麻生伸一) 定期試験は実施しない。

■履修上の留意点(授業以外の学習方法を含む)

・沖縄各地で行われている祭り、学内外で行われる舞台・演奏会などを見に行くこと。 行事、イベント等については講師がその都度紹介する。

■成績評価の方法・基準

- □**方法** 平常点(20%)、レポート(2回、合計80%)。平常点は講義への参加状況により総合的に判断する。 講義後にリアクションペーパーを課すこともある。
- □基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献(資料)等

□参考文献

和辻哲郎『風土—人間学的考察』(岩波書店、1979年)

_	科目コート	授業科目名	<i>単位致・字期</i>	受講年次	授某区分	担当教員名
	14023 (14021) (14022)	芸術と科学 (芸術と科学 A) (芸術と科学 B)	2 単位 後期	1~4	講義	藤田 喜久 渡久地 健(非) 北村 誠(非) 宮崎 悠(非)

■テーマ 「芸術」と「科学」との関係性(多様性・類似性・相違性など)

■授業の概要

様々な科学分野(自然科学や人文科学)を専門とするゲストスピーカー(講師)を招聘し、芸術と科学との関係性についての話題を提供する。

■到達目標

- ・「芸術」と「科学」との関係性(多様性・類似性・相違性など)について理解する。
- 「芸術観」や「科学観」について自らの考えを持つことができる。

■授業計画 · 方法

パソコンによるプレゼンテーション、板書、DVD鑑賞、その他様々な視覚資料を利用して講義を進める。

- (1) 講義ガイダンス:芸術と科学との関わり(担当教員:藤田喜久)
- (2) 琉球絵画・紅型と亜熱帯の自然/コラム: W・モリスのデザイン (渡久地 健)
- (3) 田中一村絵画を植物地理学から見る/コラム:江戸花鳥画と本草学(渡久地 健)
- (4) 南島歌謡をサンゴ礁地形学から読む/コラム:文学と植物学(渡久地 健)
- (5) 西洋絵画にみるエコロジー思想/コラム:文学と自然地理学(渡久地 健)
- (6) 芸術作品に関わる様々な化学物質(北村 誠)
- (7) 分子の構造とその機能(北村 誠)
- (8) 匂いの科学(北村 誠)
- (9) 光の性質、「色」とは何か(宮崎悠)
- (10) 生物の色彩とその機能、生物の視覚について(宮崎悠)
- (11) いろいろな「色の仕組み」一構造色、蛍光、発光(宮崎 悠)
- (12) 文化や芸術の中に見る自然・生物の造形や色彩(宮崎悠)
- (13) 生物の形と機能(藤田喜久)
- (14) 音にまつわる生物学(藤田喜久)
- (15) サイエンティフィックアート / まとめ (定期試験は実施しない) (藤田喜久)

■履修上の留意点(授業以外の学習方法を含む)

- ・毎回の講義では、講義内容を要約したプリントを配布する。授業時間外の宿題として、ごく簡単なレポート課題を 不定期に与えることもあるので、毎回の講義を欠席しないようにすること。
- ・2回目の講義からゲストスピーカー(講師)が担当するため、各自登録をすませておく事。

■成績評価の方法・基準

- 口方法 平常点 (60%)、期末レポート (40%)の内容で総合的に判断する。「平常点」は、授業への参加状況と毎回のコメントペーパーの内容により総合的に判断する。「期末レポート」は、期末試験の代替として課し(提出期限の2週間前までに課題を提示する)、提出内容により評価する。
- □基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書·参考文献(資料)等

□教科書:特に指定せず、毎回講義時に資料を配布する。

□参考文献:講義中に適時教示する。

科日コート	授耒科日名	<i>单位数 * 字期</i>	文	授耒区分	担当教員名
14033	言語と文化				仲原 穣 (非)
(14031)	(言語と文化 A)	2単位 後期	1~4	講義	新城 和博 (非)
(14032)	(言語と文化B)				波平 八郎(コーディネーター)

亚维尔尔 拉米瓦八 担业数量点

■テーマ

言葉がものの考え方や文化をある程度規定することを理解する。また、文化的なことがらを言葉で表現する力を付ける。

■授業概要

「言語」は単なる表現・伝達の手段ではなく、手段を超えて考え方の枠組みを作るものとして捉えられている。「文化」 もそのような言語との相互作用によって生みだされるものである。本講義は「現代文化」と「言語」との相互作用の関係を複数の教員が講義する。まずは沖縄語の概要を学び、文化の基層に言葉が根付いていることを理解する。次に現代沖縄のポピュラー文化の中にウチナーグチを見いだし、文化が言葉を通して継承されていることを理解する。

■到達目標

文化と言語の相互作用の関係を理解する。また、言語がバイアス(かたよった物の見方)を生みだすことを理解する。

■授業計画·方法

- (1) 履修ガイダンス
- (2) ウチナーグチ (沖縄語) (1) (仲原穣)
- (3) " (2)
- (4) " (3)
- (5) " (4)
- (6) "(5)
- (7) "(6) レポート1提出・前半授業のまとめ
- (8) 沖縄のポピュラー文化とことば(1)(新城和博)
- (9) " (2)
- (10) " (3)
- (11) '' (4)
- (12) " (5)
- (13) " (6)
- (14) レポート2提出・後半授業のまとめ
- (15) 授業全体のまとめ (定期試験は実施しない)

■履修上の留意点(授業以外の学習方法を含む)

各教員によりレポート等が課される。

■成績評価の方法・基準

□方法 平常点 (出席を含む 50%)・レポート (50%) を総合的に判断する。

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書·参考文献 等

□教科書

なし。授業中に適宜プリント等を配布する。

□参考文献

各教員が適宜指示する。

科目コート	授業科日名	単位数・字期	党講年 次	授某区分	担当教員名
14052	芸術と心の臨床	2 単位 前期	1~4	講義	松田盛雄(客)

■テーマ 心理学的手法を用いて自己理解を深め、表現芸術と精神の関係を考える。

■授業概要

自分とは何か、自分の性格はどのように形成されたか、アイデンティティーの確立とは何か、などについて自分の 内面と向き合う作業を通して自己理解を深め、それが表現者としての修行や活動とどのように結びついているかを講 義全体を通じて理解を進めていく。また、自分自身に対する「気づき」が、自身のストレス解消や対人関係の改善に 具体的に役立てられるよう、担当教員の実務経験を活かしながら授業を構成する。

■到達目標

- ・自己理解を深めつつ他者理解を促し、他者との関係作りに活用できるようにする。
- ・自分の生き方と芸術活動との関係性について客観的視点を持てるようにする。
- ・心の病及びその予防法や治療法について学び、大学生活への適応促進に役立てる。

■授業計画・方法

- 1. 自分を知ること・表現すること:メンタルヘルスとは何か
- 2. 自分とは何か:認識論から読む自分の心と性格
- 3. 自分を知る(1):交流分析(東大式エゴグラム)による自分の性格分析
- 4. 自分を知る(2):描画法(バウムテスト)による自分の性格分析
- 5. 家族の心理学(1):親と子の関係
- 6. 家族の心理学(2):不適応の問題
- 7. アサーティブな対人関係:適切な自己主張や自己表現とはどのようなものか
- 8. アサーション・トレーニングの実際:アサーティブな会話の練習
- 9. 心の健康とストレス:ストレスを引き起こすものを知る
- 10. ストレス反応とストレス・マネジメント
- 11. 発達障害について:発達障害のタイプとその特性
- 12. 深層心理の世界:夢の分析を通して自分の無意識を考える
- 13. 心の病気と治療の心理学(1):いろいろな精神障害と症状
- 14. 心の病気と治療の心理学(2):現代に特徴的な心の病と治療
- 15. 授業のまとめ:大学生活への適応と学生相談の活用について

■履修上の留意点(授業以外の学習方法を含む)

- ・心理学の基礎的説明は省略するので、一般教養科目の「心理学」を既に履修していることが望ましいが、予習読書課題を読みこなせる程度の知識があれば履修は可とする。
- ・講義用レジュメや参考資料を多く配布するのでファイルにして活用すること。
- ・課題レポートを科すので、指示に従って作成し締め切り日までに提出すること。

■成績評価の方法・基準

口方法 評価は、平常点(20%)とレポート課題2点:自己分析(40%)、事例を読んでの感想課題(40%)などを総合的に判断して行う。平常点は授業への参加状況で判断する。レポートはコンピュータを使用して作成し提出する。期末試験は実施しない。

□基準「到達目標」を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献(資料)等

□教科書

指定しない。講義レジュメはその都度配布する。

□参考文献(資料)

『対人関係を通しての自己理解ワークブック』 遠藤健治編著 培風館 2013年 『大学生活をゆたかにする心理学』 心理科学研究会編著 福村出版 2013年 『ワークショップ 大学生活の心理学』 藤本忠明編著 ナカニシヤ出版 2014年